探究的な学習の在り方に関する研究推進地域

連携中学校区：世羅町立甲山中学校区

連携地域を構成する学校

学校名	学級数	児童生徒数
世羅町立甲山中学校	７	１３０
世羅町立甲山小学校	９	１４３
世羅町立せらひがし小学校	８	１２４

（R5.12.1現在で記入）

１　研究の概要

（１）研究テーマ及び研究のねらい

研究テーマを「地域の未来を見据え，探究的に学習する児童・生徒の育成―経験単元の開発・実践と評価の工夫を通して―」とし，小中９年間の総合的な学習の時間及び生活科において，教師及び児童生徒が探究の過程を意識して学ぶ探究課題の内容や評価方法について系統性をもたせた教育活動を展開し，「持続可能な社会の形成者」として地域社会で活躍する人材を育成することをねらいとして研究を進めた。

（２）資質・能力の設定について

本校区では，令和３年度より児童生徒に身に付けさせたい資質・能力を次の２点に重点化し，校区で共有して研究に取り組んでいる。

①自発性（自ら課題を見つけチャレンジする力，自ら学習の進捗管理をする力）
②コミュニケーション能力（伝える能力，受け取る能力）

令和５年度はこれらの力の育成を図るため，次の３点について校区内で共通理解を図り，実践した。
①資質能力を発達段階ごとに整理し，９年間の系統を明確にして指導することで自発性とコミュニケーション能力の育成を図る。
②課題設定の場面で課題意識をもたせるために，児童・生徒の思いや願いを大切にする授業づくりを行い，自発性の育成を図る。
③カリキュラムマネジメントの視点から，教科学習や学校行事との関連をもたせたプロジェクトを設定し，全教育課程で資質・能力の育成を図る。

（３）取組について

【探究的な学習の充実に向けての取組】

令和４年度に開発した単元を基に，新たな経験単元の開発及び実践を行った。１年間で校区の全学年が１単元以上を開発・実践した。以下はその例である。

甲山小学校第1学年	がっこうのななふしぎをさがそう
せらひがし小学校第5学年	アスパラガスの廃棄量削減プロジェクト
甲山中学校第　3学年	Serappy プロジェクト

【小中連携の取組】

年度当初に，各学年でどのような学習テーマを取り扱うかを校区で共有し，研究推進の見通しを校区でもつことができた。また，必要に応じてオンラインを活用し，推進教員が連携を密に行ったことで，各校の取組の進捗状況の確認や研究推進や授業づくりの共通理解を図ることができた。

研究協議の視点を校区で統一し，各校の校内研修に参加する体制を整えたことで，児童生徒の姿を基に授業の成果や改善点について話し合う機会が増え，授業改善につながった。

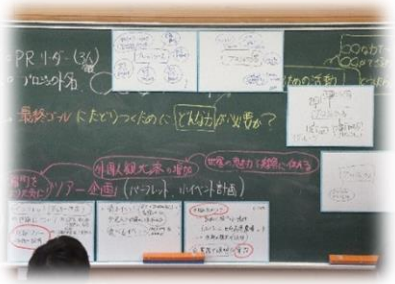
２　実践事例

【探究的な学習の充実に向けての取組】

甲山中学校第３学年
『Serappy プロジェクト～世羅町の魅力を外国人に伝えよう～』

この単元では，観光客が多く訪れている世羅町だが，近隣の市町村に比べて外国人観光客が少ないということに着目し，外国の方に世羅町の魅力をPRし，世羅町に訪れてもらうことで町の観光を盛り上げ，世羅町を元気にしようというプロジェクトである。外国人観光客を呼び込むという点から英語科と関連をもたせた，教科横断的視点にたって開発した単元である。

①課題設定
「最高学年としてどのようなプロジェクトに取り組めばよいだろうか。」

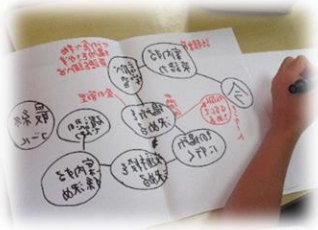


「昨年度のプロジェクトで身に付けた力」は何かや，それを受けて「今年度はどのようなことに取り組んでいきたいか」を話し合い，活動方針を定めた。昨年度，修学旅行先で世羅町の魅力を動画でPRした経験から，今年度は，対面で世羅町の魅力を伝えたいという思いが生徒に生じ，観光ルートを作成し自分たちが案内するという活動方針が決まった。

英語科での問い
・総合的な学習の時間で取り組むプロジェクトと英語の授業をどのようにつなげることができるだろう。

②情報収集「世羅町の観光地にはどのようなところがあるのだろう。」

実際に，観光ルートを作成するにあたって，どの場所を紹介すればよいか情報を収集した。情報を収集する中で，「世羅町にある有名な観光地は，甲山中学校から離れており，どのように案内すればよいか。」や「甲山中学校区に紹介できる観光地が少ない。」などの課題が生じた。そこで，インターネットには載っていない地元ならではの観光地はないかなど，幅広く情報を集め，観光ルートに取り入れていった。



英語科での問い
・どんな英語を用いるとエスコートしやすいだろうか。
・道案内で使えそうな英語の表現はどんなものがあるか。

③整理・分析
「最適な観光ルートとは，どのようなルートなのか。」

収集した情報を基に，ルートを作成し，下見を行った。下見の結

果，ルートの変更や，食事場所やお店の定休日などの新たな情報を収集する必要性を感じ，新たな課題が生じた。実際にやってみて分かったことを整理・分析しながらより良い観光ルートを意欲的に作り上げようとする姿が見られた。

英語科での問い
・集めた英語表現を場面ごとに整理してみよう。使える場面を想像しながら整理しよう。

④まとめ・表現

「自分たちが考案したエスコートルートで留学生の方は満足してくれただろうか。」

本プロジェクトの最後に，まとめとして広島大学に在籍している留学生の方に来町していただき，実際に考えた観光ルートの紹介を英語で行った。

活動後に，本質的な問いに立ち返り，「自分たちのプロジェクトが相手に喜んでもらえるものになっていたか」や，「この活動が世羅町の元気につながるものになっていたか」を振り返った。振り返りでは，「世羅町には，外国人の方に楽しんでもらえるところが多くある。」という気づきから，「世羅町には外国人向けのパンフレットがないので，どのようなところがあるかが伝わっていないのではないか」という新たな課題設定へとつながる兆しも見られた。また，多くの生徒にとっては，学習した英語を活用して外国人と関わる初めての経験となった。生徒の振り返りには，「授業で学習する英語を実際に用いて紹介することは思ったより難しかったけれど，これからも実際に使える英語を身に付けていきたいと思う。」という記述が見られた。

英語科での問い
・より幅広い人に世羅町を知ってもらうために英語科の授業で自分たちにできることは何だろう。

【個に応じた指導の充実】

校区全体で，課題設定の場面で児童生徒の「解決したい・やってみたい」という思いや願いを大切にし，単元構想をすることに取り組んだ。予定していたよりも多くの授業時間が必要となったが，児童生徒が自分事として捉えているからこそ，自発的に学習に取り組む姿が見られた。また，学級全体で一律の活動にそろえるのではなく，小グループごとに計画を立て活動に取り組むことで，調べ学習やインタビュー活動などに必要感をもって取り組むことができた。

３　研究の成果と課題等

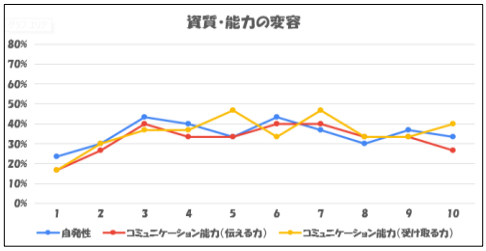
（１）成果

下の表は総合的な学習の時間に関する甲山中学校区の全教員に対して行ったアンケートの結果について，令和３年度から令和５年度までの同時期を比較したものである。

設問	年度	当てはまる	どちらかといえば、当てはまる	どちらかといえば、当てはまらない	当てはまらない
「総合的な学習の時間」及び「生活科」の授業では、課題の設定からまとめ・表現に至る探究の過程を意識した指導をしていますか。	R3	23%	68%	9%	0%
	R4	45%	45%	10%	0%
	R5	54%	42%	4%	0%

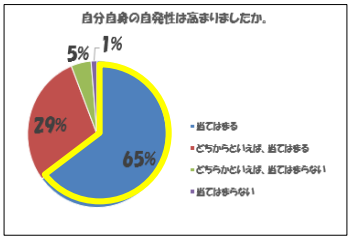
肯定的評価が100%であり，自信をもって指導を行える教職員が増えた。探究的な学びの在り方について，その都度振り返りを行い，共通理解を図ったことによりこの結果につながったと考える。

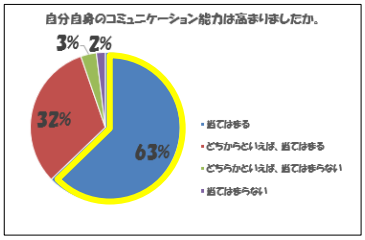
また，右のグラフは，甲山小学校第６学年「大田庄歴史館の来客数を増やそうプロジェクト」で行った第１回から第10回までの自己評価表におけるＡ評価の割合の変容である。このように，どの資質・能力もバランスよく育成されている学年が多くあり，プロジェクトを通して資質・能力の高まりが見られた。



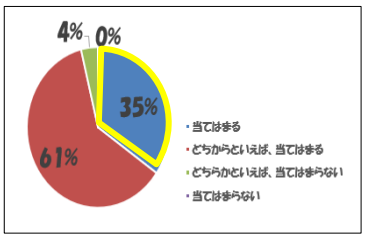
（２）課題

下記のグラフは，「自身の資質・能力が高まったか。」という問いに対する児童生徒の意識調査の結果である。「当てはまる」と自信をもって回答している児童生徒が６割以上見られ，自己肯定感が高いことが分かる。





しかし，教師に対する意識調査の「児童生徒の資質・能力は育成されましたか。」という問いに対する「当てはまる」という回答は，右のグラフの通り，４割以下にとどまっており，児童生徒と教職員での捉え方に乖離が見られた。



（３）今後の改善方策等

以上の成果と課題をもとに，次年度以降に向けて重点的に取り組んでいく項目は次の３点である。

①引き続き，各学年に所属している探究的な学びを担当する教師（研究部員）が率先して各学年の単元開発を行えるようにする。

②ルーブリックの内容について，実践を踏まえ，より児童生徒の実態に合うよう，評価の観点や文言の見直しを図り，目指す姿を明確にする。

③資質・能力の育成について，児童生徒と教職員での捉え方の乖離をなくすために，適切なフィードバックを行う。